

The Lin Yutang House

林

語

堂

✓

故

居



# 林語堂旧居

世の中に  
完全無欠の人間な  
どいやしない  
ただ  
上流に向かって泳



林語堂は1895年(清光緒21年)10月10日、福建竜溪(彰州)県で生まれ、1976年(民国65年)3月26日香港で亡くなりました。享年82歳です。遺体は翌4月に台北に戻り、旧居の裏庭に永眠しています。

林語堂旧居は、同氏が晩年の10年間を過ごした場所です。台北市政府は林語堂の文学的功績を記念して、夫人の廖翠鳳女史から寄贈された蔵書・著作・原稿・遺品などをこの旧居に集め、「林語堂記念図書館」を設立、1985年5月に開館しました。

台北市文化局ができると、ここはさらに拡大・活性化され、「著名人旧居」と「文学生活館」の機能を備えた空間にする企画が始まりました。一般からの入札と審議の結果、仏光人文社会学院が経営管理権を取得しました。その後、2005年10月東呉大学に経営が委託されました。

展示物を見学する。文芸講座を聴く。食事や休憩をする。こういったことができる山腹のこの空間に来ると、思想家であり、発明家、文学者でもあった林語堂の生前の息吹を感じることができます。



# 旧居の風景

敷地の中に畑があり  
畑の中には家がある家の  
中には庭があり  
庭には樹がある  
樹の上には空が広がり  
空には月が浮かんでいる  
快哉かな



林語堂はこう言っています。「私は土地がほしい。緑に覆われていないといい。子供たちが遊べ、花や野菜を植えることができ、数羽の鶏が飼えればいい。朝は鶏の鳴き声で目を覚ましたい。家のそばには喬木があれば、なおさらいい。」

林語堂旧居は、陽明山の山腹に語堂自身の設計により1966年(民国55年)に建てられました。伝統的な四合院住宅で、スペイン風建築デザインが取り入れられています。洋の東西の美、それに現代感覚と古典美を兼ね備えています。

青い瑠璃の屋根瓦に白い壁がよくマッチし、また白壁に円と四角が織り成す深緑の模様の窓飾りが付いているところなどに、その上品さと手の込んだ趣向が感じられます。西洋風アーチ型の門をくぐって中へと進み、回廊に出ると、吹き抜けの中庭が広がります。そして、その廊下に立つスペイン風の螺旋状の柱が、柔らかな日差しを浴びて、長い影を落としています。竹と石を愛した語堂は、庭の隅に翠竹、楓香、蒼蕨、藤などの植物と変わった形の石で池を作り、魚を泳がせました。語堂はよく池のそばの大理石の椅子に座り、「持竿観魚」を楽しんだものです。



## 経歴室

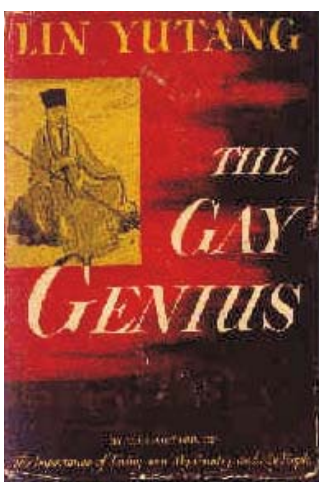
東西文化に両足を踏み入れ  
一心に宇宙の文章を評じる



林語堂は、子供の頃から聡明でした。ドイツのライプチヒ大学で言語学博士号を取得した後、1923年に帰国し、北京大学英文科教授となりました。日曜大工の好きな語堂は、夫人のために人体工学を取り入れた座り心地のいい椅子を設計しました。1947年にはニューヨークで中国語明快タイプライターを発明しています。

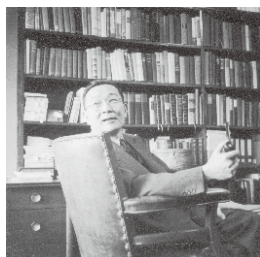
語堂は生涯に三つの雑誌を創刊しました。1932年に半月刊の『論語』を創刊し、ユーモア文学を提唱し、自身はユーモア大師と呼ばれました。1934年には『人間世』、翌1935年には『宇宙風』を創刊しました。20世紀、中国文化精神を西洋に紹介した人物はたくさん出ましたが、語堂はその中でも第一人者と言えるでしょう。語堂が英語で書いた本としては、『吾國吾民』(わが国土わが国民)・『生活的藝術』(生活の発見)・『京華煙雲』(北京好日)・『風聲鶴唳』(嵐の中の木の葉)・『朱門』(朱ぬりの門)・『老子的智慧』(老子の智慧)・『蘇東坡傳』(蘇東坡)などの名著があります。

言語学者、思想家、文学者、旅行家、発明家といったさまざまな肩書きを持つ語堂がこの世を去る時には、すべての業績を残していってくれました。



# 書齋展示室

文人にならなくても人と  
しては生きていける  
しかし一旦文人になったら、  
人として生きていく  
のは難しい



林語堂は読書には二つの目的があると言いました。品のある顔にすることと言葉に重みを持たせることです。彼はこうも言っています。「本を読む習慣がない人は、時間的にも空間的にも監禁された状況の中にいるのと等しい。接するのは何人かの友達だけ、見えるのは自分が存在する生活環境の中で起きることだけ、という監獄のような状況である。そこから抜け出すことは難しい。ところが一冊の本があれば、まったく別の世界に入っていくことができるのである」。この言葉から、語堂は、別に知識を得るためとか、道理を深めるためとか、そんな大きなことのために読書をしていたのではないことが分かります。語堂は、ただ生活を楽しむために本を読んでいた。

目の前のこの机が、語堂を別の世界に引き入れたと言っても過言ではありません。語堂は自身が発明した「上下形検字法」と「国語ローマ字ピンイン法」をもとに5年の歳月をかけて『林語堂当代漢英辞典』をつくり、1972年に香港中文大学から出版しました。語堂はこれを自身の代表作とみなしています。

この展示室には、手書きの原稿、蔵書、文鎮、英字タイプライターなどが陳列されており、語堂が生きていた頃の様子をよく留めています。想像してみてください。ほんの少し前にはこの机の前で語堂氏がパイプの煙をくゆらしながら、人々を驚かせる文章を書くためにペンを走らせていたということを。今あなたが立っている窓のそばに、語堂もかつて佇み、思いをめぐらしていたと想像してみてください。ここに来てお茶を飲むと、きっと語堂の息遣いが感じられますよ。



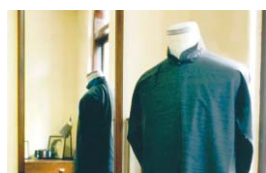
# 寢室展示室

私には暖かいベッドが  
必要である  
ベッドさえあれば、ど  
んな人とも平等でいら  
れる



語堂は、莊子と陶淵明を崇拜し、袁中郎と蘇東坡を愛しました。彼らには、洒脱で物事に淡泊、人生を楽しみ、暇をうまく利用するという共通点があります。語堂自身にもそういうところがあるので、親しみを覚えたのでしょう。語堂はまた、体と心の関係も重視し、「ベッドに横たわって行う芸術」を唱えました。そしてこう言っています。「人生の最大の楽しみはベッドの上で足を曲げて寝転ぶこと。最高の審美と知識に達するためには、手の位置を研究しなくてはならない。最高の姿勢は、ベッドの上に全身を横たえるのではなく、軟らかい綿の枕を使い、体を敷布から30度の角度に保った姿である。両手は頭の後ろに置こう。こういう姿勢をとることによって、詩人は不朽の名作を書くことができ、哲学者は思いもよらぬすばらしい思想を生み出し、科学者は画期的な発見をすることができる」。

この寢室はシンプルにしてとても心地よいです。語堂がベッドを愛することあたかも机のごとくであったに違いありません。この部屋のベッド、ふとん、服、履物などを見ていると、語堂の寝息が聞こえてきそうです。どの夢だったのでしょうか。深みのある言葉を発しているユーモア大師の語堂に出会いました。



# 客間と食堂 展示室

もしも閑談できる友  
がいるならば  
それは一冊の名著を  
読むより愉快なこと  
だ



「己を知る友と出会った時だけ、心にあることを腹藏なく何でも話し合うことができる。語り合う時はみんな好き勝手にくつろいだ姿勢である。ある友は両足をテーブルの上に伸ばし、一人は窓の格子に腰掛けている。床に座っている者もいる。椅子の上の座布団を布団代わりにして横になってもいい。閑談する時は手足をくつろげる位置に置いたほうがいい。体がくつろいでこそ心霊は働くものだ。これがすなわち古人が言った『眼前一笑皆知己、座上全無礙目人』である」。

客間と食堂には旧式の茶卓、ソファ、テーブル、椅子などが展示されています。どれも使い込んだ後の光沢でピカピカしています。語堂夫妻がいかに客好きであったか、また、友人にいかにも愛されていたかが分かるようです。夫妻を中心にした仲間たちが、このテーブルの椅子やソファに腰掛け、お茶を飲み、語り合ったことでしょう。みんなが談笑しているにぎやかな声が聞こえてきそうです。

食堂の壁には語堂氏が自ら書いた「有不為齋」という四文字が掛かっています。「有不為」とは、俗に流されないという処世哲学を表しています。世の中には、どうにもならぬことがあるということです。



## 有不為齋

世の中に、私たちが  
慎重に行う価値があ  
るものがあるとすれば、  
それは、宗教でも、学  
問でもなく、食べるこ  
とである。



ここはかつて語堂氏夫妻の食堂兼客間だったところです。現在は開放され、ここを訪れる人たちに飲食を提供しています。お気に入りの本を持ち込んでのんびりと読むこともできるし、親友たちを誘い合って、食事をするのもいいですし、お茶を飲むのもいいです。味わいのある文字に囲まれ、愉快地語り合うのは、至福の一時でしょう。木の扉を押して外に出ると、語堂が生前よくくつろいだベランダに続きます。語堂はかつてこう書いています。「黄昏時、仕事を終えて、夕食を食べ、その後西瓜をほおばった後、一人ベランダに出て涼む。口にはパイプをくわえ、煙を燻らす。夜の帳が下り、目の前の山々は徐々に暗く朦朧としていく。下の方に目をやると天母の町の家々に灯りがともっている。心地よい風が吹き、考えるともなく考える。快哉かな。」

このこじんまりとした空間に、今は木製の小さいテーブルと籐の椅子が並んでいます。ここは自然を眺めるのに絶好の場所です。昼間は晴天に浮かぶ雲を眺め、夜は月見をするのもいいし、月下の夜景を見るのもいいです。黄昏時には欄干に寄りかかり、かつての語堂のように夕日が観音山に沈んでいくのをのんびりと眺めるのをおすすめします。



# 史料特蔵室 兼 室 観覧セミナー

好きな作家に出会う  
ことは知識を増やし  
ていく上で重要な役  
割を果たす  
生き物  
それが人間である



林語堂はこう言っています。「私は土地がほしい。緑に覆われていなくていい。子供たちが遊べ、花や野菜を植えることができ、数羽の鶏が飼えればいい。朝は鶏の鳴き声で目を覚ましたい。家のそばには喬木があれば、なおさらいい。」





林語堂旧居は、陽明山の山腹に語堂自身の設計により1966年（民国55年）に建てられました。伝統的な四合院住宅で、スペイン風建築デザインが取り入れられています。洋の東西の美、それに現代感覚と古典美を兼ね備えています。

青い瑠璃の屋根瓦に白い壁がよくマッチし、また白壁に円と四角が織り成す深緑の模様の窓飾りが付いているところなどに、その上品さと手の込んだ趣向が感じられます。西洋風アーチ型の門をくぐって中へと進み、回廊に出ると、吹き抜けの中庭が広がります。そして、その廊下に立つスペイン風の螺旋状の柱が、柔らかな日差しを浴びて、長い影を落としています。竹と石を愛した語堂は、庭の隅に翠竹、楓香、蒼蕨、藤などの植物と変わった形の石で池を作り、魚を泳がせました。語堂はよく池のそばの大理石の椅子に座り、「持竿観魚」を楽しんだものです。





## 空間配置図

- |                  |  |
|------------------|--|
| 1. 書齋展示室         |  |
| 2. 寢室展示室         |  |
| 3. 客間兼食堂展示室      |  トイレ  |
| 4. 経歴室           |  バス停  |
| 5. 有不為齋          |  駐車場  |
| 6. 史料特蔵室兼閲覧セミナー室 |  公衆電話 |
| 7. バルコニー         |  |
| 8. 中庭            |  |
| 9. 林語堂墓地         |  |
| 10. 展望台          |  |



# 【ご利用案内】

開館時間：午前9時～午後5時 入館料：30円 休館日：月曜日  
レストラン営業時間：午前10時～午後9時

## <留意事項>

■  
ペット、飲食物、危険物の持ち込みは禁止になっています

■  
衣類の整っていない方の入館はご遠慮願います

■  
展示品の保護のため、本館全域に監視カメラが設置してあります

■  
混雑を避けるため、係員の指示に従って入館いただきます

■



■  
仰徳大道は休日は7時から15時まで乗用車の乗り入れが禁止されています  
北投か天母の道を通って来ることはできます

■  
旧居の斜め向かいに駐車場があります

■  
当館では、ボランティアガイドを募集しています  
お志のある方は当館のスタッフにまでご連絡ください

- ◆ 管轄：台北市政府文化局
- ◆ 委託：財団法人私立東呉大学



台北市仰徳大道二段141号 電話：02-2861-3003 ファックス：02-2861-9337  
E-mail: dr.lyt@msa.hinet.net Website: <http://www.linyutang.org.tw>

アクセス：260、303、紅5、小15、小16、小17

永福のバス乗って「林語堂故居」で下車